

1:25,000 都市圏活断層図「恵那」 解説

本図幅内には、日本列島の中で最もなだらかな山地に属する三河高原が広く分布し、後期白亜紀の珪長質深成岩類を基盤地質とし、それを新生代の堆積岩類が覆う。

標高 500–1,700m にある三河高原には丘陵背面としての削剥面が頂部に発達し、その周辺にはいわゆる土岐面（侵食面と堆積面）が分布する（森山ほか，1985）。土岐面は土岐砂礫層（前期川更新世）の堆積面と考え、北西走向を主とする共役断層系の運動によって大きく縦ずれ変位を受けてきた（森山，1985，1990）。これらの地形面を大きく変位させ、地形境界に一致することから確実な活断層として、屏風山断層と恵那山断層が認定されてきた（活断層研究会，1991）。その後、中田・今泉編（2002）による詳細デジタル活断層図ではその多くが新时期地形の変位情報がないことから削除されたが、岐阜県が作成した詳細活断層図（鈴木・杉戸編，2010）では、山麓扇状地の縦ずれ変位を認め再度推定活断層として認定されている。本調査においても、屏風山断層においては数か所であるが山麓部の扇状地に低断層崖を認め、また恵那山断層においては同様の低断層崖と河川の右横ずれを認めたため、山地北西麓を限る連続性のある崖地形に沿って両者を活断層（多くは位置やや不明瞭）として表記した。屏風山断層は、全長約 49km 中津川市下市付近から恵那市南部および瑞浪市南部を通り、土岐市駄知町に至る、南東傾斜で南東側上がりの逆断層帯である。南東側の山地を隆起させる変位様式をもつ。大局的には撓曲を伴う南東上がりの縦ずれ変位が卓越する。平均変位速度は 0.3mm/年、最新活動、活動間隔については不明である（地震本部，2004）。恵那山断層は、全長 37km（推定活断層を含む）、中津川市正ヶ根谷付近から恵那市岩村・山岡を通り、土岐市鶴里町付近にいたる、南東傾斜で南東側上がりの逆断層帯である（一部右横ずれを伴う）。南東側の山地を隆起させる変位様式をもつ。大局的には撓曲を伴う南東上がりの縦ずれ変位が卓越する。平均変位速度は 0.3mm/年、最新活動、活動間隔については不明である（地震本部，2004）。

（千葉大学教授 宮内崇裕）

引用文献

- 1) 森山昭雄・丹羽正則（1985）：土岐面・藤岡面の対比と土岐面形成に関連する諸問題。地理学評論，58，275-294
- 2) 森山昭雄（1990）：中部山岳地域における山地形成の時代性—山はいつ高くなったか？。米倉伸之・岡田篤正・森山昭雄編「変動地形とテクトニクス」古今書院，87–109.
- 3) 活断層研究会編（1991）：「新編日本の活断層—分布図と資料—」。東京大学出版会，437p.

- 4) 中田高・今泉俊文編（2002）：「活断層詳細デジタルマップ」．東京大学出版会，DVD-ROM2枚・付図1．60p.
- 5) 鈴木康弘・杉戸信彦（2010）：1:25,000岐阜県活断層図．岐阜県，138p.
- 6) 地震調査研究推進本部地震調査委員会（2004）：屏風山・恵那山断層帯及び猿投山断層帯の長期評価について．

http://www.jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou_pdf/53_54_byobu_ena_sanage.pdf